

英語を学ぶために

村主幸一

みなさんが中学・高校と学んできた英語力を急上昇させることができるのは、文法全体も習い終え、基本的語彙もある程度仕入れた今の時期です。学習効果というものは、努力のコツコツに対してグングンと正比例の直線を描くものではなく、いわば低空飛行時代があって、ある時急に機首が上を向いて加速度的に舞い上がるものらしいですが、そのような成層圏への突入のチャンスが今です。まず初めに、1時間に読める英文の量を少しずつ増やす訓練をしましょう。一冊の本を読みだすと、同じ単語が繰り返しあらわれたり、著者のスタイルに慣れたり、自然読みがはやくになります。この上達は目に見えます。つまり、1時間に半ページ速度から1ページという具合に。英語の読みの達人は、自分の読みのスピードが日本語（翻訳）で読むスピードを抜いたと感じられる瞬間があるものです。それは感覚的な暴走の喜びです。また、この上達は一冊読み終わると感覚的にわかります。最初の一冊をなるべく短時間で読み上げるのがコツです。つまり、二冊目が楽し、メドがつきます。スピードを競うわけですから、英文を読むときの姿勢も大切。片手で原書を押さえ、片手で辞書を引いていたのでは、初めからこのレースは失格。書見台を買ってきて原書をそこに固定させ、両手で辞書を引きます。

このスピード・アップの訓練のためのテキストは、数多く出ている英語の対訳本（左ページに英文、右ページにその訳）にしましょう。ひとつ推薦するなら、サマセット・モーム短篇集。これに歯が立たないなら、Oxford 大学出版局から出ている語数を制限した読みのテキスト。Oxford Progressive English Readers のシリーズは、1400, 2100, 3100, 3700, 5000 語に分類。Alpha Book は、1000, 1500 語 の二種類。

このように着々と成層圏入りの準備をしつつ、それらの本のページを合計して3000ページは読みましょう。これらは成層圏入りの最低の条件。この条件を達成しないと、やがてあなたの英語力は消滅していくでしょう。「最低 3000 ページ」は常に授業で学生諸君に説きます。これを聞いたある1回生は、夏休みにモームの『人間の絆』を読み終えました。700ページ。次の原書にかかっているそうです。スピードと量について述べましたが、今後はこれからの英語学習の考え方をはっきりとさせることを提案します。高校までは一つの学科としての英語があり、また素振りの時期でもあったので、語学の関心というと、単語・構文・文法・発音という形で存在したでしょう。しかし、大学レベルの英語の読みとは、あなたの持っている知識・思考力・感覚のすべてを動員してあたるべきものです。英語の背後に広い世界が開かれていて、英語を通じてその世界の一部に触れるのだと考えてください。

初め翻訳で読んだもので、これが自分にとっての一冊と思われる本を次には原書で読んでみて下さい。ある生物学の先生は、教養部時代にダーウィンの『種の起源』を原書で読み終えました。彼はこのとき、文章の難解さに四苦八苦しましたが、以来科学の書物や論文でダーウィンよりむずかしい英文のものとは出会わないそうです。ある哲学の先生は、これも教養の時、トルストイの『戦争と平和』を英訳で読んだのですが、自分の以後の英語力の土台を作ったと言っています。Penguin Books は英語の岩波文庫のようなもので（岩波文庫とはちがい、料理・園芸などの本がありますが）、あらゆる分野の名著が収められています。そのカタログ（出版社のHP参照）は原書を探すのに役立つでしょう。またカタログの英語タイトルをみて、どの日本語の翻訳書であるのかわかることも大学での語学力の一部です。原書をどのように探したらよいかかわからないときは、その分野の先生にお聞き下さい。すぐれた注釈のついたテキストなどは、その分野の先生のみ知っているものです。英米文学については、研究社の英米文学双書及び小英米文学双書に詳しい註の付いたテキストがあります。

自分の力を総動員して読むのが大学レベルの読みの課題だと言いましたが、また逆に、外国語で読むことは思考力を鍛えるという作用があります。英語教育についても著書のある外山滋比古氏が「読み」を、既知の事がらを読む「アルファ読み」と未知の事がらを読む「ベータ読み」に分類して、後者について次のように述べています。

ベータ読みは努力をとまなう。口あたりもわるい。堅くて噛みくだくのも大変である。よほどの意欲がないと、しなくてはいけないと言われたくらいではできるものではない。社会へ出ると、学校の勉強ではベータ読みを相当やっていたような人がそんなことは遠い昔であったかというように、もっぱら通俗のアルファ読みにわれを忘れる。それでも、ものを読まないに淋しいという。活字を追ってれば、目は読書をしていると錯覚する。しかし、仕事の上での失敗があった、というようなときには、アルファ読みでは用をなさない。宗教書を買いたくなる。哲学書を読みたくなる。ベータ読みによって、今の自分を止揚したいと考えるのであろうか。（『読書の方法』講談社現代新書 633）

外国語の読書は、「既知のことすら、未知のように見える」ので、自然と「入念な読みの習慣」が育てられます。

「読み」の楽しさ？も厳しさも自分の内面世界でひっそりと味わわれることが多いのと対照的に、「実用英語」と呼ばれている英語の運用能力は、少なくとも字面（じづら）の意味では社会の中でのやりとり・とりひきに役立つ能力を表していますが、その実多くの人々

が今日話せて聴ける英語力を習得したいと思っているのは、未知なる人、未知なる国の人と直に感覚的に人間的に接したいというより深くにあるけれども、また素朴な動機からきているのかも知れません。そしてフラストレーションを覚えずに意味の疎通が行なえるようになるのは並たいていのことではありません。世の中に英会話ブームがありながら、それが少なくとも私にとっては浅薄に見えるのは聞き取り、会話の学習努力がリーディングとの連携を軽視していることです。速読・多読ができなければ、会話はあいさつ・公式表現にとどまります。

多読の努力を怠らないようにしながら、話したり聴いたりする努力を開発しましょう。数年前から自分が聴解の訓練に利用しているのは、audible.com (今は Amazo.com の傘下) から有料でダウンロードする、一冊の本を丸々朗読した音声ファイル (オーディオブック) です。非会員として商品を単品で購入することもできますが、私はいちばん低額の会員になっていて、だいたい月に一度一冊のオーディオブックを入手しています。サイトは——
<http://www.audible.com/>

Audible (オーディブル) の推薦者にはあの勝間和代氏もおられ、ご自分のブログで利用方法を解説しているのを見たことがあります。私自身のオーディブル体験では、バーネットの『秘密の花園』(*The Secret Garden* by Frances Hodgson Burnett) の朗読を聴いて新しい発見がありました。ひねくれて育った主人公メアリーがヨークシャーの自然の中で本来の姿を取り戻してゆく様子が、彼女がヨークシャー方言になじんでゆく過程とともに描かれており、今回それが初めて実感されました。また『エクソシスト』(*The Exorcist*) は著者であるW・P・ブラッティ自身が朗読しており、少女の体をのっとった悪魔が発する声は著者によってこのように想像されているのかとわかります。他にもオーディブルのお薦め作品を少し挙げておきます。次の二つは40時間もの長時間の朗読なのに会員価格は1000円少しです。

・ Ken Follet, *The Pillars of the Earth*, Unabridged ed. (40 hrs and 10 min)

日本語訳はケン・フォレット『大聖堂』

・ Ken Follet, *World Without End*, Unabridged ed. (45 hrs and 3 min)

日本語訳はケン・フォレット『大聖堂—果てしなき世界』

これを読んで下さるのは新入生諸君が多いでしょうが、その他の学年の人たちで英語学習から遠ざかっている人たちにひとこと申します。英語の解釈がとてもむずかしいとある時期見えて、その学習から離れていても、他の勉強や経験を積んだ後に、しばらくぶりで読んでみると案外やさしくわかることがあるものです。それは4歳の子が、縄とびをするのに練習を重ねてもむずかしいが、6歳の子は自然成長の力によってわずかな練習によってできてしまうのに似ています。人間の場合には、さまざまな経験というものが、ある特殊

な能力を育てるのに、からだの成熟と同じような条件としてはたらくことがあるものです。
みなさんも一度試してみてください。